



ともに未来へ

絆 きずな をつなぐ

立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業



あのごとも これからも
はじまりの いまがある
立命館大学校友会

東日本大震災復興・再生のために

このたびの東日本大震災によって
尊い命を奪われた皆様のご冥福を心よりお祈りするとともに、
被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。

日本はこの大震災により、大きく深い傷を負いました。
立命館校友や現役学生においても、深刻な状況に直面しています。

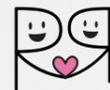
しかしながら、ただ途方に暮れるだけではなく、
被災地を中心とする日本の復興・再生に向けて、
わたくしたちは、力強く、前に進んでいかなければなりません。

いかなる艱難辛苦があろうとも、
ともに手を携えて乗り越えていくことが
いまを生きるものの使命であります。

わたくしたち立命館大学校友会は、
参加する多様・多世代校友の英知や厚志を結集し、
被災された校友・現役学生に対して
あたたかい支援を行っていきたいと思います。
そして、社会全体の復興・再生に貢献するために
校友会をあげて全力を尽くし邁進していきます。

2011年6月4日

立命館大学校友会 幹事会 一同



あのことろも これからも
はじまりの いまがある
立命館大学校友会

ご挨拶

立命館大学校友会は、2011年3月11日の東日本大震災発生後、同年6月27日に復興支援特別委員会を立ち上げ、現地のニーズに合わせて組織的・継続的に復興支援事業をおこなってまいりました。これまでの活動を通じて、校友のきずなが深まり、復興にむけた歩みが進められています。立命館大学校友会の復興支援事業にご支援いただいた皆さまに心から御礼申し上げます。

東日本大震災以降も、大地震や台風・豪雨により日本各地で甚大な被害がもたらされています。日常の中で想定外の事象が次々と起こりうる今日において、周到な備えを心掛けることが何より大事になってきているのではないのでしょうか。

本誌が、校友をはじめ多くの皆さまにとって、震災の教訓を踏まえて日頃より防災への意識を高める契機となることを願っております。

立命館大学校友会 会長 村上 健治 ('70産社)



「天災は忘れた頃にやってくる」という有名な警句がありますが、災害多発の昨今、むしろ「忘れる前にやってくる」と思ったほうがいいのかもかもしれません。加えて「明日は我が身」の心構えも大切です。だからこそ、有事の際には「お互い様」の謙虚な気持ちで、災害に遭われた方々に寄り添い、少しでも心の負担を和らげて差し上げようとする姿勢、行動が大切なことと改めて思います。

9年に及ぶ立命館大学校友会の「東日本大震災被災地復興支援」の活動は、2020年3月をもって一つの区切りを迎えます。この活動で学ばせていただいた多くの事柄を、今後に引き継いでいきたいと思っております。

立命館大学校友会 副会長 林 幸雄 ('73産社)



東日本大震災復興支援活動にご支援いただき、9年間支えていただいた校友の皆様
に心から御礼を申し上げます。

この活動が目指したのは二つです。一つは東北各県そして影響が大きかった岩手、宮城、福島
の被災された校友、校友会への支援。二つ目は大震災で得た貴重な教訓を全国の校友
の中にどのように残し、伝え、活かすかです。一つ目の地元の校友、校友会への支援活動は十分ではありませんが皆さまに満足いただけたのではないかと自負いたしております。二つ目は被災三県に毎年実施した復興応援ツアーに参加した校友が400名に上りました。参加いただいた皆さまが被害の現実を目の当たりにし、語り部の被災者から得た貴重な教訓を多くの人に伝え、残し、そして活かし続けていただいています。

最後に活動を長年にわたり支えて頂いた委員の皆さまの献身的活動、そして校友会事務局の皆さまの的確で心暖かいサポートに感謝申し上げます。

皆さまありがとうございました。

東日本大震災復興支援特別委員会 委員長 川下 史朗 ('72経済)



東日本大震災 復興支援事業の紹介

目的

- ① 校友の校友による校友のための復興支援とし、被災地・日本の復興に繋ぐこと。
- ② 被災地の校友（校友会）のニーズに応え、校友会全体の活動の活性化・組織の強化に繋ぐこと。

事業の概要

被災地の校友（校友会）と全国の校友（校友会）をつなぐ「場」と「機会」の創出

- ① web サイト上での情報の発信と交換の場の創出
復興支援に関する情報を発信し交換することを目的とした「立命館大学校友会東日本大震災復興支援情報サイト」を開設しました。
- ② 「オール立命館校友大会」への被災された校友の招待
2012～2017年度「オール立命館校友大会」において、東日本大震災の被害が特に甚大であった岩手県、宮城県、福島県に在住の校友（各県より毎年約10名、延べ160名）を招待しました。

「東北応援ツアー」の実施

復興支援事業の一環として、全国の校友を参加対象とした「立命館大学校友会 東北応援ツアー」を実施しました。

〈趣旨・目的〉

- ① 被災地（特に被災地の校友が経営・勤務する店舗や施設）を客として訪問することで、被災地の活性化に貢献すること。
- ② 全国の校友が被災地を訪問し、また被災した校友と交流することを通して東日本大震災について学ぶ契機とすること。

「予約採用型奨学金」の給付

東日本大震災で被災した学生の就学支援を目的として、2012～2016年度入学者を対象として、立命館大学と折半して授業料半額相当額の奨学金を給付しました。

支援の対象

主として、岩手県、宮城県、福島県において被災された校友の方々

「義援金」・「復興支援金」の募集と推進、配分

立命館大学校友会では、東日本大震災の直後（2011年3月24日～）より、被災された校友へのお見舞い金とすることを目的とした「義援金」を募集。「義援金」の募集終了後（2013年8月1日～）は、岩手・宮城・福島県校友会による復興に向けた取り組みのサポートを目的とした「復興支援金」を募集しました。「義援金」・「復興支援金」ともに被災地のニーズに合わせて、適宜、配分を行いました。ご協力いただいた個人、団体・グループの芳名を会報誌「りつめい」に掲載、「立命館大学校友会東日本大震災復興支援情報サイト」においても、ご協力いただいた団体・グループ名、個人の人数を公表しました。

「義援金」・「復興支援金」の配分結果

義援金 〈募集期間〉 2011年3月24日 ～2013年7月31日	2011年7月	第1次	1,900,000円
	2011年12月	第2次	4,400,000円
	2013年1月	第3次	6,200,000円
	2014年1月	第4次	430,000円
		合計	12,930,000円
復興支援金 〈募集期間〉 2013年8月1日 ～2016年12月20日	2014年1月	第1次	3,000,000円
	2015年1月	第2次	2,850,000円
	2016年1月	第3次	1,500,000円
	2017年1月	第4次	1,435,149円
		合計	8,785,149円
「義援金」「復興支援金」合計			21,715,149円

ご協力いただきました全ての皆さまに、心より御礼を申し上げます。

被災地の校友（校友会）と 全国の校友（校友会）をつなぐ「場」と「機会」の創出

「オール立命館校友大会」への被災された校友の招待

2012～2017年度「オール立命館校友大会」において、東日本大震災の被害が特に甚大であった岩手県、宮城県、福島県に在住の校友（各県より毎年約10名、延べ160名）を招待しました。



▼「オール立命館校友大会2013 in 京都」
2013年10月26日（土）
於）ホテルグランヴィア京都



▲「オール立命館校友大会2015 in OIC」
2015年10月11日（日）
於）大阪いばらきキャンパス
開設から半年を迎えた
大阪いばらきキャンパスを見学



▶「オール立命館校友大会2011 in 京都」
2011年10月29日（土）
於）ホテルグランヴィア京都
岩手県・宮城県・福島県在住校友の代表者6名が登壇し、和太鼓・芸能集団「BATI-HOLIC（パチ・ホリック）」のメンバーのリードで和太鼓演奏に挑戦



▲「オール立命館校友大会2017 in 京都」
2017年10月21日（土）
於）ホテルグランヴィア京都

▼ 2017年8月
岡山県校友会総会



▲ 宮城県校友会 大沼久明会長

▼ 2017年9月
大阪校友会総会



▲ 岩手県校友会 菊池宏会長

▼ 2017年11月
石川県校友会総会



▲ 福島県校友会 三村智春副会長

全国校友会総会キャラバン

2017年度は東北3県校友会（岩手県・宮城県、福島県）より、支援くださった全国の校友に向けて、直接のお礼ならびに復興支援事業の報告・広報（東北応援ツアー、オール立命館校友大会2018 in 仙台）が行われた。

左記の他、東京校友会、新潟県校友会、愛知県校友会、滋賀県校友会、福岡県校友会、熊本県校友会の総会でも実施。

東北応援ツアー (2012～2017年度)



被災地の校友から「もっと被災地に足を運んで欲しい」との要望や、全国の校友から「義援金による支援しかできないのがもどかしい。何か他の形で復興支援がしたい」との要望が多数寄せられ、岩手、宮城、福島各県校友会による企画運営支援のもと、「東北応援ツアー」を開始しました。2012～2017年度まで6年間計20回のツアーで約400名

の校友が参加。東日本大震災の被災地を訪問し、現地の校友と交流する中で、被災の状況、復興の進捗状況を学びました。また、農産物や海産物などが豊富で、数多くの歴史スポットや温泉を有する東北の魅力を知る機会、さらには宿泊、土産品の購入などを通じて、被災地を支援する機会となりました。

震災学習

震災の「風化」や「風評被害」を防ぎ、正しい知識や情報の共有を行うため、震災学習を行いました。

ツアー中の勉強会では、被災された現地校友および被災地

在住の方から、被災体験や復興の現状についての話をいただき、活発な質疑応答が行われました。

岩手県 [Iwate]

1～3

三陸鉄道 震災学習列車に乗車。三陸鉄道の社員の方がガイドとなり、震災当時の被害状況や現在の復興状況についての説明が行われた。

4 勉強会にて参加者に、津波が及ぼした被害の大きさ等、震災関連の話をする金野氏(岩手県校友)。

5 復興まちづくり情報館(陸前高田市)にて、震災前の美しい写真を手に震災前、震災発生時の高田松原の話をする鈴木氏(岩手県校友)。

6 「奇跡の一本松」を含む津波の大きな被害を受けた沿岸地区被災地を見学。写真は旧・道の駅高田松原「タピック45」。



宮城県 [Miyagi]



- 1 宮城県気仙沼向洋高等学校の岸教諭より、震災発生当時の映像を交えた講話が行われた。
- 2 勉強会で、熱心に耳を傾ける参加者たち。
- 3 震災発生当時、閉上地区に在住していた佐々木圭亮・靖子夫妻(宮城県校友)の案内で日和山を訪問。
- 4 木村氏(宮城県校友)が経営する「木の屋石巻水産」を訪問。津波で壊滅的な被害を受け、復興に向けて歩みを進めている石巻本社工場を見学。
- 5 南三陸町の防災対策庁舎前で黙祷を捧げる参加者たち。
- 6 バスの車内で、日頃の備えの大切さを説く大泉氏(宮城県校友)。

- 1 福島県産の美味しい野菜を口にし、農作物などの安全性を確かめる参加者たち。
- 2 「ヴィレッジ」にて復興プロジェクトについて説明を受ける参加者たち。
- 3 風評被害に負けず、ITを駆使してトマトを生産している農家「あかい菜園」を訪問。
- 4 浪江町副町長(当時)より、復興状況について話を聴く参加者たち。
- 5 「コミュタン福島(福島県環境創造センター交流棟)」視察見学。
- 6 福島大学 中井学長(福島県校友)より、「福島の震災復興と未来について」をテーマに講演が行われた。

福島県 [Fukushima]



観光

風評被害により観光客が減少していることから、東北の美しい景勝地、美味しい郷土食、地酒などを堪能しながら、「観光して復興支援」を実施しました。

岩手県



▲ 2011年に世界遺産に登録された平泉の「中尊寺金色堂」



▲ 三陸復興国立公園の代表的景勝地「浄土ヶ浜」



▲ 立命館大学理工学部の学生・院生が建設した簡易集会所「ODENSE」を訪れ、買い物をする参加者たち

宮城県



▲ 日本三景のひとつである松島の遊覧船に乗船



▲ 「瑞巖寺」を観光する参加者たち

福島県



▲ 「五色沼」を散策



▲ 「大内宿」では江戸時代にタイムスリップしたかのような街並みを散策



▲ 会津「鶴ヶ城」から眼下に見下ろす景色を楽しむ参加者たち

現地校友会と参加者との交流

勉強会後は現地校友の方とツアー参加者と親睦を深め、郷土料理や地酒と一緒に食べて飲み、美味しさやその安全性を感じてもらおう交流会を開催しました。交流会では、年齢、居住地などの垣根を越えて、参加者、現地校友、復興支援特別委員同士で交流を深めました。

岩手県



福島県



宮城県



東北応援ツアーの趣旨に賛同した松井大輔選手(元日本代表のプロサッカー選手)のお父様(校友)より、松井選手が被災地を思っプロデュースしたTシャツの寄付をいただき、全員で着用。

佐々木ご夫妻(宮城県校友)が経営する「ささま」。ひとつひとつ丹念に職人の手わざで作られた笹かまぼこをそれぞれ炭火で焼き、頬張る参加者たち。

参加者の声

岩手県コース参加者の感想

- 実際に訪れてみて岩手県は美しく、素晴らしいところだと心から思いました。他都道府県にはない美味しく安全な食べ物がたくさんあるので、もっと多くの人が岩手県を訪れ、岩手県産のものを購入する架け橋となるように全国にアピールしていきたいです。
- 新聞やテレビで被災地のことがあまり報道されなくなったこともあり、自分の中でいつの間にか東日本大震災は風化しつつありました。現地を訪問し、復興への道はまだまだ半ばにあること、そして震災の被害に負けず前を向いて歩いている人たちがいることを知りました。被災地そして被災者がいることを忘れずに、自分にできる形で復興支援に取り組んで行きたいです。
- 立命らしいツアー企画でした。これほどハードな学習をするとは思っていませんでしたが、現地で頑張っている校友、岩手県校友会の皆さん、参加者みんなの問題意識が高く、最高の旅でした。たくさんの人に出会えていい思い出がたくさん出来ました。

福島県コース参加者の感想

- ツアーに参加するまでは『もう何年も経っているのに、今福島に行っても震災のことを学べないのではないか』と思っていた中、今回福島県を訪れ、東日本大震災について多く学ぶことができました。福島県の方々が放射性物質への対策に最大限の配慮をし、生産物が安全であることを知りました。風評被害に負けず前を見て進んでいる福島県に、これからは自分にできる形で『見て、買って、観光して』復興支援をどんどんしていきたいです。
- 放射能という目に見えないものへの恐怖と風評被害に苦しんでいる福島県。『福島県を励ましたい』と思って参加した東北応援ツアーでしたが、前を向いて力強く歩みを進めている福島県校友会の方々に、逆に励まされ、力をもらいました。福島のものを食べたり、旅行したり、生産者の方たちの安全への取り組みを周りに伝えるなど、自分にできる形で復興支援に取り組み、これからも福島県に寄り添って行きたいです。
- 今回のツアーに参加しなければ「反原発」の意味が今後わからなかったと思っています。
- 当時から福島に住み、被災した人の話を直接聞くことができ、校友という身近な存在の方々の苦しさを知ることができました。より身近な問題として、今後も積極的に交流していきたいと思いました。

宮城県コース参加者の感想

- 宮城県の被災地や、実際に被災した方々からお話を聞いて、震災はまだ終わっていないと知りました。震災の記憶は決して風化させてはならず、これからも自分出来る復興支援を続けていきたいです。
- 被災地を励まそうと東北応援ツアーに参加しましたが、『石巻水産』さんや『ささま』さんが前を向いて頑張っている姿を見て、逆に自分が元気を貰いました。宮城県が一日も早く復興できるように、これからは自分にできる形で支援をしていきたいです。
- 初めて校友会のイベントに参加したのですが、幅広い年代かつ様々な場所の方とお会い出来、すごく刺激になりました。まだまだ社会人の駆け出しなのですが、会社以外の社会人の先輩とつながれてよかったです。今後もしっかりと繋がって行きたいです。
- ツアーの開催は、毎年でなくても良いと思いますので、2年に1回とか3年に1回とかぜひ継続して実施していただきたいと思います。

設立当初から続く 助け合いの精神

川下 立命館大学校友会は1919年に設立されました。それからわずか4年後の1923年に関東大震災があり、被災した校友への支援活動を行っていたという記録が残されています。なぜ京都に本部を置く校友会が、遠く離れた関東の被災地に思いを寄せる活動ができたのか。それは校友会の成り立ちと無関係ではないように思います。校友会は母校の大学昇格に必要な供託金を集めるために、全国の校友たちが募金活動を行う中でつながり、立ち上がった組織ですから、全国組織となっても、校友同士心の距離は近く、募金もスムーズに行うことができたの



間もない段階であっても、校友同士の心の距離は近く、募金もスムーズに行うことができたの

ではないかということです。こうした活動は北但馬地震および北丹後地震を経て、阪神・淡路大震災や熊本地震の募金活動にも活かされました。このように考えると、校友会の歴史の中で災害復興支援活動は常に大きな位置を占めており、切り離せるものではないということがわかります。東日本大震災復興支援特別委員会を設立してからこれまでの復興支援の活動内容を振り返り、将来に活かすようなご提言をいただければと思います。

東日本大震災直後 その時校友たちは

今中 東日本大震災復興支援特別委員会が初めて開催されたのは2011年の6月ですが、それ以前から、当時の山中諄校友会会長の指示のもとで義援金の募集が始められていたと聞いております。委員会発足当初の議事録を見ますと、校友会として何ができるのだろう、何が求められているのだろうということを徹底して議論していました。その結果として、三つの柱となる事業「義援金・復興支援金の募集と配分」、「校友大会への被災校友の招待」、「東北応援ツ

アーの実施」に取り組んできました。さらに、「オール立命館校友大会2018 in 仙台」では防災シンポジウムを開催し、長期的支援を目的とした防災食を開発するなど、復興への想いを未来へつなぐ機会としました。今日、お集まりいただいたみなさまには、「東北3県の校友会がこれまでの活動を通じてどのように変化を遂げたか」というテーマでお話させていただきたいと考えております。まずは、震災発生時、各校友会においてどのような取り組みを行われたかについてお話しさせていただきたいと思います。当時を思い出させてしまうことになるかもしれませんが、震災当時、福島県校友会会長でいらした富田顧問からよろしくお願ひいたします。

富田 私は中通りの伊達市に住んでおり、2日間の停電の後、テレビで浜通りの被害の大きさを知って、これは大変だと思いました。相馬市の校友に「どのような支援をしたら良いでしょうか」とお手紙を出したところ、食料はあるが衣類がないということで、校友会幹事の方々に衣類の提供をお願いしたことが、私なりの活動の始まりでした。義援金の配分を検討するため、まずは浜通りの校友に往復はがきを出しましたが、所在不明で多くが戻ってきませんでしたので、

役場の方に、「この方々に私の連絡先を伝えてください」とお願いして、ようやく連絡がつくようになったところでした。中通りや会津の校友



とも連絡をとった上で、義援金の配布委員会を作り、どのような基準で、どなたに差し上げたら良いかということを検討しました。それに基づいて配分したお見舞金を、被災した校友へお贈りしたところ、大変喜んでいただき、お礼状もいただきました。震災を経てつながりのできた校友とのきずなは貴重な財産であると考えています。

佐々木 私は、人口5,000名の内、800名近い方が犠牲になった宮城県名取市関上で被災し、自宅も工場もすべて失いました。避難が遅れて避難所の名簿に載っていなかった私たちを、大学の方が探してくださいました。大学、全国の校友のみなさまに本当にあたたかい支援をいただき、立命館

未来に伝える 復興支援のあゆみと校友のきずな

東日本大震災で大きな被害を受けた岩手・宮城・福島の校友会。
被災地の校友を支援するため立ち上がった東日本大震災復興支援特別委員会。
それぞれの立場から、これまでを振り返る。[座談会実施日：2018年6月10日(役職名は当時)]
『立命館大学校友会設立100周年記念誌』より転載



岩手県校友会会長
菊池 宏さん
('65文)

宮城県校友会副会長
佐々木 靖子さん
('76文)

東日本大震災復興支援
特別委員会委員長
川下 史朗さん
('72経済)

東日本大震災復興支援
特別委員会委員
今中 智幸さん
('94法)

福島県校友会会長
桑原 勇健さん
('69理工)

福島県校友会顧問
富田 良夫さん
('67法)



なくては、私たち夫婦の人生は考えられないというのが正直な思いです。副会長でありながら被災して何もできず、義援金配

分委員会の立ち上げから被害状況の調査まですべて県校友会役員の方々にしていただき、ありがたくお見舞金を頂戴しました。立命館のつながりでご支援いただけたことが、次のステップに進むための力になり、お金と一緒に勇気もいただいたと感じています。

菊池 岩手では、震災発生後20日程度で、校友会名簿から沿岸部の校友をリストアップし、個々の被災状況を把握しました。校友が1名、校友の父親が1名亡くされました。そのご家庭や家屋全壊のご家庭には5年間で6回ほど訪問しています。訪問するメンバーを変えると、また一から話をさせていただくことになるので、すべて私一人で訪問しました。宮古に住むある校友は、3人の子供がいるが、お見舞金を持ってきてくれたのは立命館だけだとおっしゃっていました。

他県の校友との交流が地元での活動の刺激に

今中 何か困ったことがあれば助け合うという校友会の精神が今回も活かされたと感じます。義援金、支援金のほか、オール立命館校友大会へのご招待も、各校友会で活用して

いただいたとお聞きしています。

菊池 最初の年はまだ余裕がなく、参加者も少なかったのですが、5年後には10名が参加しました。その後は希望者が多くなって抽選を実施しています。校友大会に参加することによって、他県の活動を肌で感じ、県内での活動にも反映されていると感じます。東北各県の総会に招待していただいたこともとても良かったです。そのような場に若手を送り出し、広く校友との交流を深めてもらうことが、今後の校友会活動には必要だという思いを強くしています。

桑原 福島では、希望者が何人であっても、予算をうまく配分しながら全員に行ってもらっています。会員から集める会費だけではなかなか活動が広がらない現実がありましたが、さまざまな支援をいただいたことで、校友会の発展につながなければならない意識が生まれ、さまざまな事業を行うようになりました。創立20周年の式典を機に新潟県校友会青年部が活発に活動していることを知り、福島でも頑張ろうという機運が高まり、今では平成生まれの校友も積極的に参加してくれています。今年の校友大会は仙台で行われますが、福島も主催者の一員です。東北6県と北海道の二つの校友会が一つの仲間になって、今後大きな花が咲くのではないかと期待しています。

自ら動くことで大きな輪を創り出していくのが立命館の良さ。それが学生にも波及していくこ



とを願います。震災の後、「そよ風届け隊」という学生団体が支援に入ってくれました。そのまま福島で就職した学生さんもいます。特に福島は原発事故もあって大変なのですが、それははねのけることのできる人材が育ってきていることを感じています。

佐々木 校友にとって、京都はいつまでもなつかしい地、でもなかなか行く機会のない地です。ご招待をきっかけに、京都に行ってみたい、行ってもいいですか?という積極的な声が若い校友から聞こえるようになったことも一つの成果だと思います。

被災地校友会のきずなも深めた東北応援ツアー

今中 復興支援事業の一つとして「東北応援ツアー」を実施しました。当初、委員会では、本当に行っても良いのか、ご負担を



おかけしてしまうのではないかと議論がありましたが、被災地の校友会からぜひ来てほしいとお願いしていただいて実施したという経緯があります。各県の校友会ではどのような準備をいただいたのでしょうか。

佐々木 当時、被災地の悲惨な状況がテレビなどで繰り返し流され、現地を訪れていいのかという疑問を持つ方は多かったと思います。しかし、校友会が主催することで参加しやすいツアーにくださったことが

とてもありがたかったです。このツアーの良さは、震災や防災を勉強する真摯な「学びのツアー」であったこと、美味しいものを食べたり買ったりする「東北活性化応援ツアー」であったこと、景色、人、味など「東北を楽しむツアー」であったことです。参加される側、お迎えする側、双方にとって有意義なツアーになりました。来てくださるみなさんを温かくおもてなししたいという機運が高まり、宮城県校友会として一致団結してきずなをより深められたこともありがたいと感じています。

今中 岩手のツアーは移動距離も長く、ご苦労もおありだったのではないのでしょうか。

菊池 大船渡、陸前高田、釜石あたりから最後は久慈に行きました。三陸鉄道に乗り、三鉄の方にガイドしていただいたこと、沿岸部の校友に、震災発生当初からの変化を話していただいたことが参加者に感銘を与えたようです。参加されたみなさんと、もっと長く、震災についての知識を共有できれば良かったと思っています。



桑原 来ていただくなら最高のおもてなしをということで、県も動かして準備しました。私の住む会津でも、原発事故の風評被害がこんなに起こっていることを考えると、現地に来ていただくことは大事だと思います。

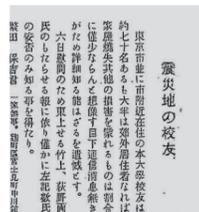
川下 立命館は東北に基盤がありません。その東北で震災後、校友のきずなが深まり、復興に向けたあゆみを進められているのは、みなさまの日々の努力の結果であると共に、校友の中の「立命館スピリッツ」が、いざというときに出るんだなと思っています。復興支援事業のあゆみと、活動を通じて培われてきた校友のきずなは立命館大学校友会、さらには立命館学園における大きな財産であり、当委員会の役割は、それらをどう残し、伝え、活かすか、その3点だと考えております。本日はどうもありがとうございました。



校友会設立当初からの復興支援のあゆみ

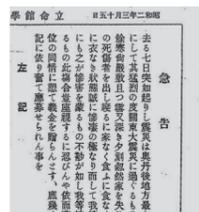
関東大震災 (1923)

発生時、東京および近郊に約70名の校友が在住。東京支部では校友の安否確認の新聞広告を掲載し、本部からは慰問と安否確認のため2名が東京を訪れた。その報告は『立命館学誌』を通じて伝えられ、関西を中心とした校友有志による見舞金471円が東京支部に贈呈された。



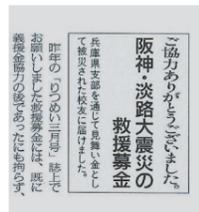
北但馬地震 (1925) 北丹後地震 (1927)

関東大震災で支援を受けた東京支部の有志が、校友会本部を通じて北但馬地震の被災校友に見舞金80円を贈呈。また北丹後地震では、校友会本部が主導して義援金の募集を行ったほか、本部から被災地に慰問使を派遣した。



阪神・淡路大震災 (1995)

学内の関係各団体とともに100万円ずつ拠出し、立命館大学関係者の総意として被災地に500万円を送金。また会報『りつめい』誌上で呼びかけた救援募金には支部・グループ・校友個人から230万円が集まり、兵庫県支部を通じて全壊・全壊の被災校友150余人に送金した。



熊本地震 (2016)

団体・個人から集まった61万7,914円のうち、9万5,888円を立命館大学が募集していた義援金と合わせて熊本県および熊本県西原村へ、52万2,026円を熊本県校友会へ寄付。またこれを機に「災害発生時における都道府県校友会への支援金支給制度」を新設した。



家族が再会するために

2011年3月11日（金）、平日の午後、私の家族は一緒に居ませんでした。私は山手にある職場、妻は海辺の職場、息子は職場非番で外出、娘は海間近の中学校。それぞれが異なる場所にいる中、東日本大震災が発災、お互いの連絡は一切不能となりました。災害時には私が職場の市役所庁舎に詰めることは家族皆知っており、妻がその日の夕方に瓦礫のなかを数時間歩いて現れました。息子は外出先不明でしたが、翌日の昼前になって訪ねてきました。その後、娘が無事であることも知ることができました。地震発生時、妻や子どもたちがいたところは数十分後に押し寄せた大津波で壊滅した場所でしたが、幸いなことに皆、避難することができました。

家族の命は助かりましたが、皆が帰るべき我が家は津波で一階の天井近くまで浸水し、大きく被災したことで、私たち家族の帰るところが無くなりました。

私たち家族の場合、私の職場が再会の場所となりましたが、家を失い、家族の安否が分からず、不安になりながら家族との再会を求めて危険な被災地をさまよった人たちが大勢いました。有事の際、我が家という家族が帰るところがなくなる場合に備えて、家族が再会する場所、集まる場所をあらかじめ決めておくことが肝要です。集まる場所を共通認識として持つことで、それぞれが行動を考えたときの大きな心の拠りどころになるでしょう。「あそこに行けば・・・」と。



from 岩手
岩手県大船渡市在住
金野 良一 さん
(81文)

防災意識を日ごろより持つことの大切さ

3.11 14:46 巨大地震発生、その後の私は間違っただけ行動を選択しました。

地震発生時刻、私は宮古市田老町の道の駅駐車場の車内で休憩中に、突然激しい揺れに襲われました。はじめ、地震だとは思いませんでした。何故なら地震ならこんなに揺れるはずがない、自分の中の地震に対しての常識が破壊された瞬間でした。その後、食糧もあり、雨風も凌げ、何よりも標高の高い、避難所としては最適な道の駅から、津浪が押し寄せる南リアス線運行部へ向けて車を走らせました。地震発生の直後、私の頭の中には避難するという考えは全くありませんでした。幸いにも私は津浪を避けるように無事に事務所にたどり着きましたが、無事で済んだのは、運が良かっただけでした。

私は、震災学習列車でガイドを務めております。皆さまにお伝えしたい事は、自然災害に対して、防災意識を日ごろより持つことの大切さです。言葉にすると簡単ですが、自然の災害に遭遇した時に自分の命は自分で守るというのが基本になります。自分の安全を確保して初めて人を助ける事ができると思います。ただ、助けられない命があったのは事実です。助けたかったのに、助ける事ができなかった。これは当事者でなければ、その選択をした辛い気持ちは解らないと思います。災害への備えは、これで十分という事はないです、自分の命を守るためには自分は何のような行動をとるべきなのか、防災の意識はそこからだと思います。災害は必ず起こります。東日本大震災の教訓は、命の大切さ、だと私は思います。



from 岩手
三陸鉄道株式会社
熊谷 松一 さん



震災の教訓を未来へつなぐ

震災の記憶を風化させない

日本の歴史にない未曾有の2011年東日本大震災津波から、2020年3月で満9年となります。立命館大学校友会の皆さまには、復興支援事業活動として岩手県大槌町に毎年ご支援をいただき感謝申し上げます。毎年、日本各地で異常気象に伴う災害が発生し、東日本大震災の記憶の風化が進んでいると感じます。被災地では、災害公営住宅整備、宅地高上げ整備等が進んでおり、2011年の津波による瓦礫、震災の爪痕を残した建物が少なくなっています。

また、震災当時、子どもであった世代が社会人となりつつある中、東日本大震災への関心レベルに世代ごとの格差が出てきているように感じています。

岩手県沿岸地は交通アクセスが悪く、東北新幹線開通後も岩手県内で内陸と沿岸の格差がありましたが、震災後、復興予算により高速道路の整備が進んでいます。より多くの人に、被災地へ足を運んでいただき、震災が遺したものを感じ取っていただきたいと思っています。今後、大災害が予想される南海トラフ地震に、東日本大震災の教訓を伝承することが私たちの使命と考えています。



from 岩手
三陸花ホテル はまぎく
千代川 茂 さん

「震災前」起こりうる災害に備える

あの日私は当時勤務していた宮城県南三陸町にある志津川高校で、あの津波を目の当たりにしました。津波は決して波ではなく、砂埃を上げて全てを破壊していく黒い塊でした。この経験から防災教育に取り組む私が伝えたいことは以下の通りです。

まず、防災とは自分の命を守り抜くことです。決して、津波も地震も自然災害を過小評価しないでください。大切なのは、難しく考えずに、できる防災をすることです。そして、防災意識・知識をつなげてください。つなげるとは校友の皆さまの未来へつなげる、家族につなげるなど様々な意味があります。「震災後」という言葉はないと考えます。確かに東日本大震災から9年が経ち、震災前後と比較ができます。しかしそれはあくまで東日本大震災です。いつ、次の災害が起きるか分かりません。だからいつでも「震災前」なのです。まさに本冊子のように、起こりうる災害に備えることはとても大切なことです。



from 宮城
気仙沼向洋高等学校
岸 貴司 さん

普段の心がけが大事

1000年に一度と言われるような津波には対策の仕がありません。津波の後、電気も水も無く、住む家まで無い生活、日が暮れたら寝る、陽が昇れば起きる生活の中、やたらと星が綺麗でした。何事も便利になる今の時代において、若い人など、これもいい経験かなと前向きに思うこともありました。今思い出してみると、弱音を吐いた人は私の周りには誰もいませんでした。ボランティアさんも被災者も頑張りました。日本人は凄いです。若者たちも被災地に応援に来て汗を流した事をこれからの人生においてきっと役立ててくれるでしょう。「缶謝」。

生き残れたのは運が良かったとしか言い様が有りません。普段から何事にも感謝して生きる。

そしてとっさの判断力、自分の事より他人の事を優先して助け合う。

物事を悲観的に捉えず無心でやり過ごす。

そうしているうちに物事が良い方に進んで行くと思います。災難はいつ自分に降りかかるか分かりません、普段の心がけが大事です。



from 宮城
株式会社
木の屋ホールディングス
木村 長門 さん
(77 経済)

閉上の記憶を伝え続ける

地震の時、私は職場におり、他の家族4人は自宅がある名取市閉上にいました。職場を後にして、閉上に帰れると思いつながら足は閉上へと向かっていました。「津波」という言葉はこの時まで想像できませんでした。

帰宅途中に「閉上に来ちゃダメ」「閉上にはもう何も無い」そんな言葉を言われても理解できず歩き続け、地震 = 津波ということが結びつかずにいました。

だんだんと周りの田んぼの水かさが増し、マンホールが水の圧力でカタカタと蓋が上がり、足元に水が来てようやく津波が来ている事実がわかったような気がしました。



その頃、閉上では津波から逃げている人たちがいたこと、そして津波にのまれてしまった父がいたことは決して忘れない、忘れられないことです。父やこの震災で命を落とした方々の想いと共に、震災を知らない子どもたちにも分かるように絵本を通して閉上という港町があったこと、次の災害に備え家族で話し合うことを伝え続けていきたいと思っています。



from 宮城
宮城県名取市在住
松崎 江里子 さん



あたりまえの日常の尊さ

2011年の東日本大震災の津波は、私から家族を含め多くの物を奪った一方、多くのことに気付かされました。津波から逃げることに、命とあたりまえの日常の大切さです。

遺体安置所で娘に思わずかけた言葉は「なんで逃げなかった」の言葉です。逃げていれば助かったはずの思いと、私の心の中にあった「どこかに逃げていてくれるはず」との淡い期待を失った気持ちがこの言葉になったと思っています。無駄になってもいいから逃げてください。

人は、いつかはこの星にさよならをします。自他問わず、命を大事にしてください。生きてくても生きられなかった人の分まで。

あたりまえの日常が幸せと思っています。ただいま、おかえりといえる毎日の生活を大事にしてください。人は多くの人に支えられています。

すべてのことに感謝、「ありがとう」。



from 宮城
宮城県多賀城市在住
佐々木 清和 さん

減災への課題意識

震災発生時は福島市消防本部に勤務していました。翌日には救助隊を派遣し、津波被害のあった地域での被災者の救出活動にあたりましたが、原発事故により他県の援助隊とともに待避することとなりました。この事故は、関係機関がそれまで行っていた原子力防災訓練の想定外の事態でした。原因のひとつに地震調査研究推進本部から出されていた長期評価への対策の遅れが指摘されています。事態収拾への道のりでは、予防策を講じた場合と比較にならない時間と費用、住民への犠牲を強いる結果を招きました。震災を契機として、防潮堤の設置など施設整備とともに災害関連の法令の見直しは進んでいますが、災害に想定外の事態はつきものと考えます。

将来発生が予測される災害に対し、想定外の事態に対処するため、過去の歴史と教訓を丹念に掘り起こし、専門家の意見に真摯に耳を傾けながら、被害を最小化する減災への体制構築が課題と考えます。



from 福島
福島県福島市在住
菅原 強 さん
(74 産社)

「3つの顔の福島」をきちんと見てほしい

東日本大震災と原発事故から8年が過ぎましたが、福島県内では今なお4.5万人が避難生活を余儀なくされています。8年が過ぎ、被災地の風化と風評が大きな課題となっています。

私は、福島県外や海外から来られた学生たちに、「福島には3つの顔があるのでよく見てほしい」と訴えます。1つ目の顔は、震災・原発事故以前と変わらない「普段通りの生活をしている福島」、2つ目は、避難を余儀なくされ、それからの「復旧・復興を進めている福島」、3つ目の顔は震災・原発事故で立ち入ることもできず「時間が止まったままの福島」です。

海外の一部では、福島は人が住めない所、行ってはいけない所という言説があります。また、日本国内では東日本大震災と福島原発事故は過ぎ去ったこと、復旧・復興は完了したという受け止め方も一部にあります。

8年が過ぎても、岩手、宮城、福島の被災地は、復興半ばです。被災地の現場をきちんと自分の目で見てきてほしいと思っています。



from 福島
福島大学 学長
中井 勝己 さん
(78院法)

風評と風化

風評被害と風化防止は裏表の関係であり、福島にとって極めて難しい課題です。原発被災地の報道は多くがマイナス的なものです。それが更なる風評を助長しつつ、報道が無いと震災は終わったものと忘れられます。

浪江町に関しては、第一原発に近い森のことを浪江全域のように報じられるなど、極めて偏った報道がされたこともありました。とても住める町ではないと思わせるには十分な内容で、浪江町に活力を取り戻そうとする私たちの苦労が踏みにじられました。浪江町に関わる偏った報道を空恐ろしく感じながら、私も他の地域に関する報道を客観的に判断しなくては思いました。復興への課題は山積であり、報道されないことも風化へとつながるという中で、正にジレンマを感じています。立命館大学校友会は現地視察を通してしっかりと現状を見てくれました。このように現場を見てくれる人々を増やしていくことが今後も大切と感じています。



from 福島
福島県浪江町 前副町長
本間 茂行 さん

寄稿

河北新報社防災・教育室部次長
大泉 大介 さん ('95国関)

東 日本大震災の発生から9年。巨大地震と大津波、原発事故に見舞われた東北は、復興のハード整備はほぼ完了しつつあるものの、被災した一人一人の暮らしの再生はまだ長い道のりです。発災直後は盛んだった支援のうねりは下火になり、風化は現実のものとなりつつあります。

母校・立命館は震災直後から、多様な支援を展開してきました。特に校友会は岩手、宮城、福島の3県への応援ツアーを実施。2018年秋には仙台で「オール立命館校友大会」を開き、校友と被災地を結んできた取り組みに大きな足跡を残しました。東北に暮らす一人として大変ありがたく、そして誇らしく思います。

私は宮城のツアーに全国の校友を迎え入れる地元校友の一人として参加してきました。仙台駅から沿岸部の津波被災地に向かう車中、マイクをお借りして体験をお伝えしてきました。地元新聞社の記者として震災前から防災報道に力を入れてきたこと。呼び掛け空しく、主たる発行地域で多くの犠牲を出したこと。連日津波被災地に通い、現地のSOSを発信し続けたこと…。皆さん真剣に耳を傾けてくれました。

校友大会では初めて「防災シンポジウム」を開催し、コーディネーターを務めました。復興の最前線で今なお悪戦苦闘する校友や、津波で壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市で副市長と務めた経験のあ

る立命館大の教授らが意見を交わし、被災の実相から復興の現実、次なる災害への備えの大切さなどを共有しました。

ツアーでもシンポジウムでも、私は繰り返し「震災を忘れないのは誰のためか」と皆さんに問い掛けてきました。一般的には、「まだ大変な思いをしている人がいるのに、忘れたら申し訳ないし、かわいそう」という同情的感覚が少なからずあると思います。それは人として、とても大切なことです。

しかし、そうした意識は「喉元過ぎれば熱さを忘れる」の言葉通り、風化には脆弱です。ましてや東日本大震災後も各地で災害は相次ぎ、「被災地」は絶えず上書きされています。

私は「災害を忘れない」のは誰のためでもなく、「自分自身のため」だと訴えています。これほどの先進国で一度に2万人を超える犠牲を出したのはなぜか。悲しい現実を直視し、そこから教訓を学び取って具体的な備えにつなげることは、またいつどこで起きるか分からない災害から自分や家族を守る礎です。

立命館のネットワークが、「災害犠牲を繰り返さない」との覚悟を確かめ合う力になることを願います。その誓いは何よりも、東日本大震災で犠牲になった方々に対する誠実な鎮魂の姿勢だと思います。



東日本大震災復興支援特別委員会 これまでの経過

2010-11年度(1年目)

- 3月11日(金)
 - 東北、関東、信越等各県校友会役職者へ安否確認を開始
- 3月24日(木)
 - 校友会ホームページで義援金募集のよびかけを開始
- 6月4日(土)
 - 特別委員会の設置を決定、復興支援声明を採択
- 6月27日(月)
 - 特別委員会発足、第1回委員会を開催、義援金の第一次配分を決定
- 7月2日(土)
 - 岩手県校友会総会
- 7月4日(月)
 - 復興支援特設サイトをオープン
- 7月6日(水)
 - 都道府県・学部・グループ校友会(計527件)へ義援金募集よびかけ
- 7月
 - 岩手県、宮城県、福島県の各校友会への義援金(第一次配分)
- 7月15日(金)
 - 第2回特別委員会
- 7月26日(火)
 - 第3回特別委員会
- 8月13日(土)
 - 福島県在住校友の家族がびわこ・くさつキャンパスのエポック立命21に滞在～21日(日)
- 9月7日(水)
 - 第4回特別委員会
- 9月23日(金)
 - 福島県校友会総会
- 10月23日(日)
 - 宮城県校友会総会
- 10月29日(土)
 - 「オール立命館校友大会2011 in 京都」への被災校友招待(岩手1名、宮城3名、福島14名)
- 11月22日(火)
 - 第5回特別委員会
- 11月23日(水)
 - 岩手県校友会による『沿岸地区校友会』(陸前高田市)の開催

- 11月
 - 被災した入学者に対する奨学金(授業料50%相当額)支援を決定
- 12月4日(日)
 - ベースボールキャラバン(日本プロ野球選手会主催、立命館大学協力)が福島県いわき市、岩手県陸前高田市、大船渡市で開催
- 12月7日(水)
 - 岩手県、宮城県、福島県の各校友会へ義援金(第二次配分)
- 12月10日(土)
 - 兵庫県校友会による「東日本大震災被災地校友と兵庫県校友会員の交流事業」の開催
- 1月9日(月)
 - 岩手県校友会による『沿岸地区校友会』(岩手県宮古市)の開催
- 1月19日(木)
 - 第6回特別委員会
- 2月25日(土)
 - 被災三県代表校友懇談会
- 3月9日(金)
 - 第7回特別委員会

2012年度(2年目)

- 4月24日(火)
 - 立命館大学が大船渡市との災害復興に向けた連携協力に関する協定を締結
- 7月13日(金)
 - 第1回特別委員会
- 8月19日(日)
 - 岩手県校友会による復興支援事業:「ODENCE夏祭り」への協力
- 9月2日(日)
 - 第2回特別委員会(宮城県仙台市)東北3県から被災状況や現状報告
- 9月28日(金)
 - 東北応援ツアーコーディネーターミーティング
- 10月6日(土)
 - 「校友大会2012 in 新潟」への東北3県校友招待(岩手3名、宮城6名、福島11名)
- 10月13日(土)～14日(日)
 - 東北応援ツアー(岩手県コース)参加者:26名 交流会参加岩手県校友:10名

- 10月13日(土)～14日(日)
 - 東北応援ツアー(福島県・スパリゾートハワイアンコース)参加者:28名 交流会参加福島県校友:7名
- 10月27日(土)～28日(日)
 - 東北応援ツアー(宮城県コース)参加者:31名 交流会参加宮城県校友:10名
- 10月27日(土)～28日(日)
 - 東北応援ツアー(福島県会津東山温泉コース)参加者:30名 交流会参加福島県校友:7名
- 12月21日(金)
 - 第3回特別委員会
- 1月23日(水)
 - 岩手県、宮城県、福島県の各校友会へ義援金(第三次配分)
- 3月30日(土)
 - 第4回特別委員会(宮城県仙台市)

2013年度(3年目)

- 4月26日(金)
 - 第1回特別委員会
- 7月31日(水)
 - 義援金の受付終了
- 8月1日(木)
 - 復興支援金の受付開始
- 10月5日(土)
 - 兵庫県校友会主催「東北三県校友会長による『阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター』視察」
- 10月5日(土)
 - 第2回特別委員会
- 10月26日(土)
 - 「校友大会2013 in 京都」への東北3県校友招待。(岩手9名、宮城9名、福島10名)
- 11月2日(土)～3日(日)
 - 東北応援ツアー(岩手県コース)参加者:25名 岩手県校友会参加者:7名
- 11月9日(土)～10日(日)
 - 東北応援ツアー(宮城県コース)参加者:24名 宮城県校友会参加者:7名

- 11月16日(土)～17日(日)
 - 東北応援ツアー(福島県相馬コース)参加者:30名 福島県校友会参加者:10名
- 11月23日(土)～24日(日)
 - 東北応援ツアー 福島県会津東山温泉コース実施。参加者:25名 福島県校友会参加者:7名
- 12月14日(土)
 - 第3回特別委員会
- 1月17日(金)
 - 義援金(第四次配分)・復興支援金(第一次配分)

2014年度(4年目)

- 5月12日(月)
 - 第1回特別委員会
- 5月12日(月)
 - 東北三県校友会と復興支援特別委員との意見交換会
- 10月4日(土)～5日(日)
 - 東北応援ツアー(岩手県コース)参加者:23名 岩手県校友会参加者:7名
- 10月11日(土)～12日(日)
 - 東北応援ツアー(宮城県コース)参加者:30名 宮城県校友会参加者:10名
- 10月18日(土)～19日(日)
 - 東北応援ツアー(福島県コース)参加者:24名 福島県校友会参加者:4名。
- 10月25日(土)
 - 「オール立命館校友大会2014 in 岡山」への東北3県校友招待。(岩手7名、宮城10名、福島9名)
- 1月17日(土)
 - 第2回特別委員会
- 1月30日(金)
 - 復興支援金(第二次配分)
- 2月11日(水・祝)
 - 2015年度東北応援ツアー岩手県コース 意見交換会
- 2月15日(日)
 - 2015年度東北応援ツアー宮城県コース 意見交換会
- 3月7日(土)
 - 2015年度東北応援ツアー福島県コース 意見交換会
- 3月14日(土)
 - 第3回特別委員会

2015年度(5年目)

- 6月27日(土)
 - 第1回特別委員会

- 10月11日(日)
 - 「オール立命館校友大会2015 in OIC」への東北3県校友招待。(岩手11名、宮城10名、福島9名)
- 11月7日(土)～8日(日)
 - 東北応援ツアー(福島県コース)参加者:25名 福島県校友会参加者:7名
- 11月14日(土)～15日(日)
 - 東北応援ツアー(宮城県コース)参加者:22名 宮城県校友会参加者:7名
- 11月22日(日)～23日(祝・月)
 - 東北応援ツアー(岩手県コース)参加者:29名 岩手県校友会参加者:12名
- 1月17日(日)
 - 第2回特別委員会
- 1月29日(金)
 - 復興支援金(第三次配分)
- 2月
 - 復興支援事業についての意見交換会(岩手県・宮城県・福島県)

2016年度(6年目)

- 4月16日(土)
 - 第1回特別委員会
- 9月3日(土)
 - 第2回特別委員会
- 10月29日(土)
 - 「オール立命館校友大会2016 in 金沢」への東北3県校友招待。(岩手10名、宮城8名、福島8名)
- 11月5日(土)～6日(日)
 - 東北応援ツアー(岩手県コース)参加者:28名 岩手県校友会参加者:9名
- 11月12日(土)～13日(日)
 - 東北応援ツアー(福島県コース)参加者:27名 福島県校友会参加者:8名
- 11月19日(土)～20日(日)
 - 東北応援ツアー(宮城県コース)参加者:26名 宮城県校友会参加者:11名
- 12月4日(日)
 - 復興支援事業についての意見交換会(岩手県)
- 12月20日(火)
 - 復興支援金受付終了
- 1月22日(日)
 - 第3回特別委員会
- 1月31日(火)
 - 復興支援金(第四次配分)
- 2月26日(日)
 - 復興支援事業についての意見交換会(福島県・宮城県)
- 3月18日(土)
 - 第4回特別委員会(宮城県仙台市)

2017年度(7年目)

- 5月13日(土)
 - 第1回特別委員会
- 6月24日(土)
 - 東北3県校友会代表者による全国校友会総会キャラバン開始。
- 8月6日(日)
 - 第2回特別委員会
- 9月9日(土)～10日(日)
 - 東北応援ツアー(岩手県コース)参加者:28名 岩手県校友会参加者:9名 宮城県校友会参加者:2名
- 9月30日(土)～10月1日(日)
 - 東北応援ツアー(福島県コース)参加者:30名 福島県校友会参加者:10名 岩手県校友会参加者:1名 宮城県校友会参加者:2名
- 10月21日(土)
 - 「オール立命館校友大会2017 in 京都」への東北3県校友招待。(岩手10名、宮城10名、福島10名)
- 11月11日(土)～12日(日)
 - 東北応援ツアー(宮城県コース)参加者:35名 宮城県校友会参加者:14名 福島県校友会参加者:2名
- 3月17日(土)
 - 第3回特別委員会

2018年度(8年目)

- 4月
 - 防災食(缶詰)開発プロジェクト開始。京料理木乃婦×木の屋石巻水産×立命館大学校友会による防災食の開発。
- 6月10日(日)
 - 東北3県の代表者と復興支援特別委員会代表者による座談会
 - 復興支援事業～今後の校友会の取り組みについて
- 10月20日(土)
 - 「オール立命館校友大会2018 in 仙台」防災シンポジウム 防災食(缶詰)の発表
- 3月17日(日)
 - 第3回特別委員会

2019年度(9年目)

- 10月19日(土)
 - 「100周年記念オール立命館校友大会」パネル展示
- 2月22日(土)
 - 東日本大震災復興支援事業小冊子「ともに未来へ 絆をつなぐ」発行

復興のその先へ ~岩手・宮城・福島より 若手校友の想い~

岩手

大船渡市 企画政策部
市民協働準備室 主事
(12産社)

平野 桃子 さん

盛岡あんどん七夕まつり
山車の運行の様子



2011年8月、私は初めて大船渡市を訪れ、360度の色のない景色を見て、言葉を失いました。想像さえできない「復興」への道を、この町が歩いていく姿を見守ろうと思い、大船渡市に住むことを決め、その翌年、大船渡市役所に就職しました。市役所では、観光関係の業務に2年、復興事業に5年携わり、現在は地域づくりに関わる仕事をしています。被災地にとって復興が一番の課題です。でも世界は待ってくれません。日本全体と同じように、大船渡でも子供が減り、働く人が減っています。他の地方都市と同じように、日本社会の課題を、突きつけられています。震災を経て、たくさんの方の努力と全国民の協力で築き上げた未来の一端が、確かにここにはあります。これを、世界の流れに呑まれ、失うわけにはいきません。復興のその先で、選ばれ続ける町でなければなりません。ここからが、本番です。



宮城

株式会社ヤマロク
代表取締役
(11産社)

山崎 達哉 さん

Yume Wo Katare
Onagawa 開業時のメンバー



東日本大震災から9年。これは、私の社会人年数と同じです。2011年という新たな節目からスタートした現代社会を、私は過ごしてきました。私たちの世代にとって、もはや東日本大震災という存在は、災害や事故などの出来事という域を超え、自分たちのアイデンティティを構成する要素の1つであるように思います。2019年、それまで故郷京都で会社経営をしていた私は、京都のすべてを手放し、東北被災地最前線、女川町で第2の起業をしました。誤解をおそれずにいえば、この起業には、災害復興のため、被災地支援のため、というような感情は、ほとんどありませんでした。現代社会の新たな節目として、国内で最も変化し、多様な人材と機会が集まるのもまた、この最前線です。危機からの脱出のみならず、前向きに進んでいくために、自分たちはどう生きるのか。いま、かつての被災地は、現代の変化の最前線として、若者にとって絶好の機会にあふれています。



宮城県女川町にラーメン店「Yume Wo Katare Onagawa (夢を語れ 女川)」をオープン

福島

一般社団法人
ならはみらい 事務局
(17産社)

西崎 芽衣 さん

一般社団法人ならはみらい
スタッフ



東京都出身、東日本大震災発生時高校3年生だった私は、現在、福島県楡葉町に暮らしています。楡葉町は福島第一原子力発電所事故により約8,000人の全町民が避難を余儀なくされました。2015年9月に避難指示が解除され、現在は約4,000の方が町内に暮らしています(2019.12.31現在)。大学の授業を通じて東北の方々、仲間、先生との出会いがあり、気づけば何度も福島に足を運ぶようになっていました。現地の方との“ひと”としてのつながりを大切にしたいボランティア活動を通じて、もっと近くで感じ、一緒に考えたいと思い、休学。震災後に設立された、まちづくりを担う団体が臨時職員として1年間過ごしました。復学後は就職活動もしましたが、最終的にはまた楡葉町で暮らすことに。現在は、主に交流施設の運営を通じた地域の方々の暮らしに関わる仕事をしています。近所の方が手入れしている花壇。会うと話が止まらない近所のおばさん。夕方になると聴こえる子どもたちの声。小さな当たり前が、ある日突然奪われた。「当たり前は、当たり前じゃない」そのことをよく知っているこの地域のひとと一緒に、自分たちの手で、また“当たり前”をつくっていく毎日を大切に思っています。



岩手・宮城・福島県校友会 会長より一言

今、思うこと

大震災から9年、全国の校友の方々からの多大の義援金・復興支援金を被災した校友に届けた時に感謝されたこと、東北応援ツアーに参加してくださった校友との交流とのこと、全国校友大会に招待していただいたこと、沿岸地区校友会総会が開催できたこと、そして「オール立命館校友大会2018 in 仙台」が開催され、岩手からも全国からもたくさんの方の校友が参加して、震災復興支援に感謝することができたこと、すべて全国の校友の皆さまのご支援・ご声援があったからと感謝しています。ありがとうございました。



岩手県校友会 会長
菊池 宏 さん ('65文)

「東日本大震災復興支援事業」へのお礼

東日本大震災では当会会員500名のうち100名余りが家屋損壊等の被害を受けました。校友会本部は震災後すぐに「東日本大震災復興支援特別委員会」を立ち上げられ、被災校友は様々な支援を受けました。

義援金・支援金だけでなく、特に「東北応援ツアー」は6年間で約180名の校友が参加され、被災校友・企業を激励していただきました。

「オール立命館校友大会2018 in 仙台」では、支援活動の総決算として「防災シンポジウム」が開催され、校友だけでなく宮城県民にも防災意識の重要性を訴えたと思います。全国の校友の皆さま、ご支援ありがとうございました。



宮城県校友会 会長
大沼 久明 さん ('62法)

全国の校友の皆さまへ感謝

全国の校友の皆さまより多大なるご支援をいただいた事に感謝申し上げます。思い起こせば2011年3月11日午後2時46分M9.0の巨大地震が発生し日本中がテレビにかじり付いたと思います。太平洋沿岸を襲った大津波、天地がひっくり返る恐ろしさを目の当たりにしました。

あれから9年、福島は原発事故の影響により、やっと復興の緒に着いたばかりです。この先まだまだ不安はつきまとう今日この頃です。

校友会からの復興支援金は被害を受けた校友に力を与えました。卒業以来このような支援を受けるとは考えも及ばなかったと述べてます。これまで福島県校友会としては復興支援特別委員会と一緒に復興支援事業に取り組んでまいりました。会員の拡大に青年部も立ち上がりました。今後は母校の発展に幾らかでも力になれるよう校友会一同協力する事を誓います。感謝



前・福島県校友会 会長
桑原 勇健 さん ('69理工)

東日本大震災復興支援特別委員会 委員より一言

未来を見つめて

この事業は、山中諄 前・立命館大学校友会会長の熱い想いとリーダーシップで始まりました。今回の災害は、大地震、大津波に加えて原発事故による放射能汚染が加わるという、我が国災害史上稀に見る大災害となり、「文明災」とも言われます。復興支援特別委員会では、全国の校友の皆さまの温かいご理解と支援をいただき、義援金・復興支援金の募集、東北応援ツアーの実施など、様々な支援活動を展開することができました。その実施にあたっては、岩手県、宮城県、福島県の各校友会会長さまをはじめ地元校友会関係者、並びに校友会事務局の皆さまに大変お世話になりました。感謝のほかありません。

前・東日本大震災復興支援特別委員会 委員長 辻寛さん ('62法)



経験を生涯の糧として

震災間も無く仙台勤務が内定、7月に名取から南三陸を巡りました。その年の校友大会で、被災3県の方々が支援を呼び掛けられ、「何かしなければ!」と強く思いました。願いが叶い2回目の「復興支援ツアー」から特別委員として、全国から参加の校友とともに語り部の方や被災県の校友の震災時震災後の復興の取り組みを伺うことができました。

校友会の震災支援に深謝
東日本大震災復興支援特別委員会 委員 藤川行江さん ('69法)



校友みんなで、行くぜ東北!

私は、発足当時から委員会に関わらせていただきましたが、実際の被災地を訪問することにより生の状況を体感すること、現地校友会の皆さまとも交流させていただく復興支援ツアー等により行って楽しむことがより援助になることを実感することもできました。

委員会としては一区切りとなりますが、引き続き東北から全国校友との絆を深めていきたいと思えます。

東日本大震災復興支援特別委員会 委員 今中智幸さん ('94法)



校友の絆

岩手県に在住している校友として、校友会が被災地支援をしていると知り、自分に何かできないかと考えているとき、校友会事務局から復興支援特別委員の声がかかりました。微力ではありましたが、岩手県の状況を多くの校友に知っていただけた事、支援のお礼を伝える事が出来た事に感謝しております。校友としてこれからも岩手を盛り上げていきます。

東日本大震災復興支援特別委員会 委員 小野寺正耕さん ('96経済)



「ロコミ」が最強の風評被害対策です!

震災をいかに風化させないか。風評被害などに頭を悩ませている福島にとっては重い課題です。仙台でのシンポジウムで全国の校友に震災の教訓や被災地の現状に触れていただけたことは大きな意味を持っています。感じたことを地元で話題にしてもらうことが何にも勝る風化対策です。「他人ごとではなく自分ごと」に。皆さまの「心の備え」の一助になれたのなら光栄です。

東日本大震災復興支援特別委員会 委員 宮川晋さん ('96法)



震災復興支援に携って

東日本大震災復興支援特別委員会の委員を拝命して約8年が経過しました。その間、被災地にも訪問し、多くの方々から震災当時のお話をお聞きすることができました。校友会の委員としてこの事業に関わることができたことは、私のこれまでの人生の中でも非常に有意義な時間でしたが、反面復興における支援の難しさも知ることができました。事業としては一旦の区切りとなりますが、これからも被災地に寄り添った支援を行ってまいりたいと存じます。

東日本大震災復興支援特別委員会 委員 田邊裕さん ('99経営)



未来を信じ 未来を生きる

2011年3月11日、私は福島県で仕事をしており当日のことは今でも忘れることはできません。いつもは当たり前前のが当たり前ではなくなりました。この経験をいかし何か力になりたいと思ひ積極的に活動してまいりました。「未来を信じ 未来に生きる」この精神は私の行動の根幹になっております。福島県の未来のため何かが残せていれば幸いです。日頃、ご指導賜りました復興支援特別委員会の皆さま、福島県校友会の皆さまにこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

東日本大震災復興支援特別委員会 委員 仲川将史さん ('06法)



校友の皆さまへの感謝とお礼に代えて

復興支援特別委員会に参加させていただくことで、忘れがちであった故郷に想いを寄せるとても良い機会となりました。そして、物理的な距離こそあるものの、校友の皆さまが東北地方や東日本大震災に対して、いつも寄り添ってくださる貴重な存在であると改めて気づかされました。お世話になりました校友の皆さまに少しでも貢献できるよう、そして校友会が更に発展するよう今後も活動ができればと考えております。ありがとうございました。

東日本大震災復興支援特別委員会 委員 黒澤健さん ('11経営)

